講談社X文庫

君と夢をみた

:

折原みと

teen's heart

折原みと（おりはら・みと）
1月27日生まれ。水がめ座。B型。東京在住。
まんが家兼小説家。
'88年のデビュー作『夢みるように、愛したい』から『君と夢をみた』まで、講談社X文庫に19作品がある。

講談社X文庫

teen's heart

君と夢をみた（きみ ゆめ）
折原みと（おりはら）
●
1995年1月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—図書印刷株式会社
製本———株式会社国宝社
カバー印刷—半七写真印刷工業株式会社

©折原みと　1995 Printed in Japan

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

講談社X文庫

君と夢をみた

折原みと

イラストレーション／折原みと

君と夢をみた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

青い夕闇。
空には、ビルの灯り。
かすかに、木々の香り。
遠くに、小さな星の瞬きさえ見える野外ステージ。
昼と夜の間の、はりつめた時間に、
熱っぽいざわめきと、鼓動が聴こえる。
時計が秒針を刻むごとに、
刻一刻と、大きくなっていく心臓の音。
時間が、近づく。
はじまりの瞬間。

会場のライトが消える。
一瞬の、静寂。
どよめき。
歓声。
流れだす音楽。
ステージの上に、
まばゆい光と、音が弾けて。

今、
その光の中に、
私の夢が、輝きはじめる――――。

2

たったひとりの相手との出会いが、自分の人生を変えてしまうなんて、
どうして、信じることができただろう。

その頃のあたしは、17歳。
しっかり者の、マジメな優等生。
子供の頃からそう言われることを、当たり前に受け入れて生きてきた。
さしあたっての将来の目標は、大学受験を無事突破することで。
その先に、特別な夢もなかった。
いつも、確実に手の届く〝現実〟だけを見つめていたあたしには、
〝夢〟なんて言葉は、何かたよりなく、フワフワと実体のないものでしかなかった。

その頃……。
あたしは、自分の中にある、見えない確かな望みにも、
まだ、気づいてはいなかった。

――――〝彼〟と出会うまで。

高3の夏がはじまる頃、
放課後の教室で、
〝有瀬森也〟と、出会うまで。

◇　◇　◇

鍵盤を叩く指先から、弾むようなメロディーが流れる。
ちょっぴりぎこちないギター。
ベースが刻む、低いリズム。
おなかに響くドラムの音。

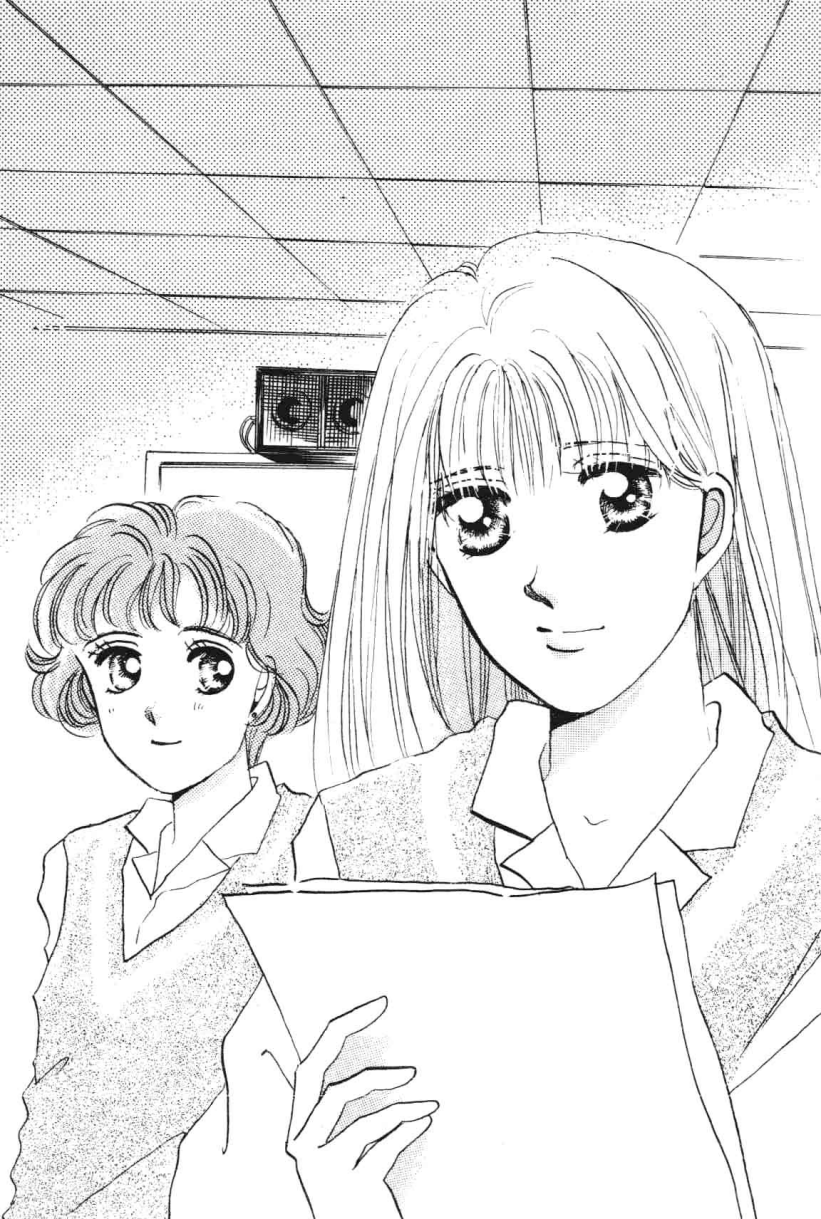
舌ったらずのシュガー・ボイスが、声をはりあげる。
少しだけ、いつもとちがう自分になれるひと時。
最後のフレーズは、一緒にコーラス。
「Thank you!」
演奏の終わりに、ボーカルがゲンキにあいさつすると、視聴覚室の中の観客から拍手が起こった。

「エミ先輩、サイコー♡」
「翔子先輩のキーボード、やっぱりちがいますよねー」
「先輩たちが引退しちゃったら、ウチの部おしまいですよー」
「なーに言ってんの。これからはあんたたちの時代でしょーが」
「だあって、軽音部は先輩たち2大スターでもってたんですよー」
「ばーっか。今さらもちあげたって、何もでないわよ。ね、翔子」
エミのウインクに、微笑って応える。
初夏らしい日ざしがさしこむ、放課後の視聴覚室。
私立緑ケ丘高校・軽音楽部。
今日は、あたしたち3年生部員ふたりの、ささやかな引退LIVE。

あたし、葉村翔子。
17歳、高校3年。
ついでにつけ加えれば、受験生。
だから部活も、今日で引退。
生徒会副会長も務める模範生としては、そろそろ受験勉強に本腰入れなきゃね。
「翔子先輩って、国立大にいくんでしょ？　さすがですよねー」
「いくんじゃなくて、受験するだけよ。合格するかどうかわからないんだから」
「翔子先輩なら絶対ですよー！　なんたって、緑ケ丘が誇る美人で才女の〝葉村翔子〟だもんっ！」
「ちょっと、受験に美人はカンケーないでしょーが」
苦笑してるあたしのかわりに、エミが2年生の頭をこづく。
エミ、こと戸川笑は、2年前、あたしをこの軽音部に引っぱりこんだ張本人。
高1の時からのバンド仲間。
…っていっても、文化祭や新入生歓迎会で年に2〜3回演奏するだけの、しがない部活バンドだったけどね。
本格的にバンドやりたい子は、学校の軽音部なんて入らない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ウチの部も、3年生はたったふたり。
1・2年生も女子ばかり10人たらずの弱小部。
曲がりなりにも演奏ができるのは、エミがボーカル、あたしがキーボード。あと、2年生の女の子3人で編成されたバンドがひとつきり。
だからこそ和気あいあいで楽しい、お茶飲みクラブだったんだけどね。
「でもさあ、翔子もったいないよねー。そんだけキーボード弾けて、ルックスもいーんだしさ。マジでバンドやったら、案外プロにスカウトされちゃうかもよ。ねぇ、受験終わったらまた、あたしと組まない？」
冗談か本気かわからない茶目っ気のある瞳で、エミがあたしをのぞきこむ。
「ムリムリ。あたし程度の腕でプロになれるわけないじゃない。キーボードはあくまで趣味にしとくわ」
「あーあ。堅実なんだから、翔子は。まっ、そこが翔子らしいんだけどね」
〝翔子らしい〟――――。
その言葉の前後についてくるのは、たいていいつもこんな表現だ。
〝堅実〟〝マジメ〟〝しっかりしてる〟。
小学生の頃からだから、もう慣れっこ。



ううん。もしかしたら、もっと小さい頃からかも。
あたし、ふたり姉妹の長女。
四つの時、妹が生まれて、
物ごころついた頃には、「お姉ちゃんだからいい子にしなさい」「お姉ちゃんはしっかりしなきゃね」って、まわりから言われ続けて、その気になってしまったみたい。
いつだったか何かの授業で、〝役割性格〟ってのを習ったことがある。
人間は、生まれつきの性質とは別に、与えられた環境や、役割によって性格が形成されるんだって。
だから、下にめんどうをみなきゃならない妹や弟がいる上の子供は、比較的しっかりした性格になることが多いとか……。
モチロン、みんながそうなるワケじゃないけれど、あたしの場合は根が単純だったのか、しっかり、そのパターンにはまっちゃった。
おまけに小学校にあがってからは、クラス委員やら何やらに選ばれるようになって、ますます優等生が身についてしまった。
自分にとってもそれが自然で、べつに不満はないけれど。
だけど時々、フッ…っと、考えてしまうことがある。
あたしって、ずっとこのままなのかな……って。

志望校は、ちゃんと合格圏内。
大学に入っても、今とさほど変わりそうにない。
エミの言うとおり〝堅実〟なあたしは、身の程知らずな夢はみない。
だから大きな失敗も、失望もない。
手の届く〝現実〟だけを望んで生きていくことが、うまく生きていくコツだとはわかってるけど。
だけどそれは、逆に言えば、
大きな喜びも、希望もない人生なんじゃないか……って。
ふと、考えてしまうことがある。
あたしがこんなふうに考えることもあるなんて、きっと、まわりの誰も思いやしない。
〝葉村翔子〟は、
いつだって、模範的な〝優等生〟だから――――。

「あ、悪い！　あたしそろそろ行かなきゃ。これから待ち合わせあるんだ」
腕時計に目をやったエミが、申しわけなさそうに後輩たちに切りだした。
近くの男子校に彼がいるエミは、今日はこれからデートの予定。

「えー？　エミ先輩もう帰っちゃうんですかー？」
「ごめんごめん。ダンナが会いたいってうるさいもんで♡」
照れもせずに、あっけらかんと言う。
あたしにはとても、エミのマネはできそうもない。
子供の頃からエレクトーンを習ってたおかげで、1年生の時、エミに軽音部に引っぱりこまれて以来のつきあいだけど、エミはまるっきりあたしとは正反対。
ヒョロッとスレンダーな長身に、色白の童顔。
髪はちょっぴり染めて、耳にはピアス。
いかにも女の子バンドのボーカルにピッタリ。
陽気で開放的で、オシャレで、かわいい。
他校の彼氏とつきあって、指には彼からもらったオモチャの指輪をしているエミに、
あたしは少しだけあこがれている……なんて。
そんなことも、たぶん、誰も気づいてはいない。
ウキウキとデートに向かうエミの笑顔を、
少しだけ「うらやましい」と思ってることも……。

「先輩――、最後にもう1曲だけ！　もう1曲演りましょうよ」

ギターの2年生がそう言うと、ほかの後輩たちからもアンコールの声が起こった。
「先輩、演って！　今日で最後なんだもん」
「ラスト1曲!!　歌ってください」
そんな声に、あたしとエミは顔を見合わせる。
「やろうか？」
「OK！　あたしたちのラストソングね」
小さな歓声があがって、バンドメンバーの2年生たちが、楽器のもとへ走る。
キーボードの前に立ったあたしは、エミと目で合図をかわす。
ドラムスティックのカウント。
イントロに続いて、マイクからエミのボーカルが流れだす。
今年の4月、新入生の歓迎会で演奏した曲。
ゲンキな女の子バンドの曲のコピー。
あたしたちは作曲なんて本格的なことはやらなかったから、演奏する曲は、みんなプロのバンドのコピーだったけど。それでもけっこう楽しかった。
キーボードを弾いている時は、少しだけ、マジメな優等生から離れられる気がした。
〝青春〟て言えるようなことなんて、なんにもなかったあたしの高校生活の中で、唯一それらしきモノが、この軽音部のバンドごっこだったかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb